18 番テーブル（乙テーブル）　総評

テーブルメンバー
高瀬（明学 3)、篠崎（法市 3)、白山（青学 3)、近藤（明治 3)、金子（高経 3)
平川（立教 3)、山本（早稲田 2)、永井（芝工 2)、加藤（法市 2)、河野（明治 2)

＊全体の流れ

オピニオンプレゼンターを決めるにあたり、近藤、白山、加藤、高瀬、篠崎の 5 人が立候補する。篠崎が刑罰の目的についての議論に基づいたニュープロ氏を提示するも、最終的にオピニオンプレゼンターは死刑囚の M/S を Harm におき、コンパリに時間を費やしたいとアピールした高瀬が選ばれる。ASQ の検証においてはオピニオンプレゼンターのアイディアを詰めていくような Q が多く見られた点は良かったが、人の話を遮って話すような場面なども度々見られた。

残り 1 時間半程度を残し NFC に入り、永井、篠崎、山本、加藤、近藤の 5 人がアーギュメントを提示する。高瀬の APA で話せるものは後で話そうという S により、NFC で話したいと提示した篠崎と加藤のアーギュのみ NFC で検証することになる。篠崎のアーギュ内容は、刑罰の目的の 1 つに「犯罪者を反省させること」が含まれるというコンセに基づき、現状死刑によって死刑囚は反省しているため日本政府が touch する必要はない、というものであった。加藤のアーギュは、刑罰の目的の 1 つに「犯罪者に苦しみを与えること」が含まれるというコンセに基づき、死刑廃止という日本政府の行動は刑罰の目的と反して矛盾が起きるため touch するべきではないという内容であった。両アーギュとも SQ と APA における論点が混在し、1 時間半の残り時間をほぼこの対応に使ったにもかかわらず、最終的に APA に流されて終わった。他人の話を遮るような介入や、表面的だけではなく相手のインテまでをもしっかり引き出して理解しようとする姿勢がなかったことが 1 番の原因であると考える。コンパリを行う時間もなく、検証できる論点がアーギュメントという形で多く提示されたものの、それを検証し結論に結び付けられなかったのは非常に残念であった。

＊NFC について

NFC で議論することもディスカッションにおいて大切なことですが、1 つ 1 つの論点が SQ と APA のどこにおける話をしているのか、ということを確認していくことも大切です。そうした理解をきちんとしていかないと、今回のような停滞が起こり、最終的に検証することなく流すだけ、という結果になってしまいます。仮に流すならば、NFC ではなく適切なエリアで時間をかけて検証できるよう対応を心掛けるべきだと思います。NFC で提示されたアイディアを適切なエリアに流す際の例としては、(今回は結果的に APA に流れたので、

流し方の一例を紹介しています。）
例として篠崎が提示したアーギュメントをまとめると、

Room　=　×touch

↓

C/C reflect　=　×touch

Room　=　C/C reflect

↓

achieve pps of puni　=　×touch

C/C reflect　=　achieve pps of punishment

となります。
このロジックだけを見ると SQ の状況に基づいていることがわかります。このアーギュに対して reflect の def などを詰めていったのは良かったと思いますが、最終的に APA に流したアイディアであるにも関わらず、そこまで至るのに長時間かかりました。
相手にとって何が問題で×NFC と言っているのかを引き出すことがポイントになると思いますが、

SQ
C/C reflect
↓
Achieve pps
↓
T/P　(abolish D/P & ALI)
↓
C/C　×reflect
×achieve pps　=problem
APA

あくまで一例ですが、たとえばこういったストリームを使って相手のアイディアをマクロにカンファメします。
そうすると、アーギュメンターが問題に思っている点は SQ ではなく APA に起こり得るということが視覚化されます。
その結果、SQ と APA の論点が整理され、APA において本当に C/C は reflect しないのか、しなかったら pps を achieve できないのか、しないなら T/P できないのか、というような論点が考えやすくなります。

こういったように、相手のアーギュメントをミクロに詰めていくだけではなく、マクロに捉えながら相手のインテを汲み取り、テーブルニーズとすり合わせていくことで S の質や通りやすさも変わっていくと思います。

＊傾聴力について
今回のテーブルは、テーブルの雰囲気は悪くはなかったものの、相手の話への理解不足による停滞が多く見られました。その上で大切にしてほしいことは「聞く姿勢」です。誰かが話し終わっていないのに遮って介入すると、理解しきれていないアサンプションが多く含まれる介入となり、ミスカンや理解格差が生まれ、それが相手のインテを汲み取っていない S などにも繋がってしまいます。あくまで話し手に基づいて、相手の話を引き出していけるような介入を心掛けて下さい。また、話し手も聞き手が理解していないと感じたら、ただ説明を繰り返すだけではなく、自分と相手とどこに理解の差があるのか、ということを考えながら話してみてください。（コモンクラッシュのカンファメはこういった場面で有効です。）

＊1位の選定理由について
　1位の高瀬は、オピニオンプレゼンターとしての介入量とＳによる進行力を評価致しました。Ｓについてはリーズニングが弱く、やや強引に通していた印象もありましたが、結果として停滞を解消し、テーブルの進行力となっていたと思います。他人のアイディアに対して鋭い視点からミクロに詰めていくことはできているので、よりマクロな視点から結論やテーブルのニーズをくみ取っていけるようなＳやＣといった介入にも期待したいです。

青山学院大学　4年
渡邊　珠英